

受付No.

## 2026年度 アートによる地域振興助成（スタートアップ）

公益財団法人 福武財団 理事長 福武英明殿

募集要項に則り、本応募用紙に記載した通り、標記助成に応募いたします。

## &lt;団体プロフィール&gt;

団体名	Art and Tidal Flats				
住所	〒292-0064 千葉県木更津市中里159-9				
団体区分	任意団体	スタッフ数	5名		
代表者氏名(カナ)	マキハラ タイスケ	役職	代表	年代	40代後半
代表者氏名	榎原 泰介				
団体URL1	https://sites.google.com/view/artandtidalflats/				
団体URL2	https://www.taisukemakihara.com/				

## &lt;申請者・実務担当者&gt; ※団体所在地と同じ場合は「同上」\*申請者には、助成に関する諸手続きの連絡担当者の名前を記入してください。

申請者氏名(カナ)	マキハラ タイスケ	役職	代表	年代	40代後半
申請者氏名	榎原 泰介				
連絡先 e-mail	tidalflats01@gmail.com	電話番号	080-2926-0856		
住所(書類の送付先)	同上				

## &lt;プロジェクトリーダーの略歴&gt; ※アートプロジェクト等の運営経験や当時の役割を記載してください。

氏名(カナ)	マキハラ タイスケ	役職/肩書	代表	年代	40代後半
氏名	榎原 泰介				
年(西暦) 月	略歴(活動内容)				
2011年9月	アートベース百島(広島県尾道市)で柳幸典氏の助手として廃校のリノベーションプロジェクトに携わる。				
2012年11月	アートベース百島開館記念展で展示会の共同企画を担当。ロンドン在住のアーティストユニットの招聘を実現。				
2020年5月	プロジェクト「Art and Tidal Flats(以下ATF)」を始動、盤洲干潟を中心に東京湾干潟のリサーチを開始。				
2024年3月	百年後芸術祭-内房総アートフェス-において自作品に関連した干潟ツアーを企画。				
2024年11月	盤洲干潟にてサウンドワークショップ「干潟を聞く」を開催(主催:ATF)。				
2025年10月	盤洲干潟にてアートイベント「干潟と芸術」を開催(助成:福武財団、主催:ATF)。				

## &lt;福武財団の助成実績&gt;

助成を受けて活動した年度
2025年度

## &lt;外部協力者の状況&gt;

氏名	年代	組織名	所在地(市町村まで)	協力内容(できるだけ具体的に)
木曾野 正勝氏	80代	半兵衛炭焼塾	千葉県君津市	「半兵衛炭焼塾」主宰。炭焼きの技術や歴史だけでなく地域の変化や里山を守る方法など多岐にわたり教えていただいている。
湯谷 賢太郎氏	40代後半	木更津工業 高等専門学校	千葉県木更津市	生態工学者。環境都市工学科教授。盤洲干潟をまわる会会員。木更津市市史編集部会自然部会委員。2025年「干潟と芸術」ゲスト。
鈴木 美和子氏	70代	旧紅雲堂書店	千葉県木更津市	歴史ある旧書店のオーナー。市内での展示会場のひとつとして場所を提供いただく。
伊東 多佳子氏	50代後半	富山大学	富山県高岡市	環境美学。富山大学芸術文化学部准教授。アースワーク、ランドアートに造詣が深い氏に環境と芸術の可能性をともに考察いただく。
近藤 亮介氏	40代前半	東京藝術大学	東京都台東区	美術批評家。東京藝術大学非常勤講師。研究テーマ「ピクチャレスク」「ランドスケープ」の観点から見解を伺う。

<活動内容・事業計画について>

表現手法	地域型芸術祭
活動テーマ	郊外（の地域振興）
事業名	Art and Tidal Flats
2026年度の活動期間	2026/04/01 ～ 2027/03/31
活動に従事するスタッフ数	5名

1. 団体の活動の概要

木更津に残る自然干潟「盤洲干潟」に興味を持ち、2020年からリサーチを開始、2024年開催の「百年後芸術祭」に作家として参加しました。そこで盤洲干潟を題材とした作品を発表し、関連企画として研究者や自然保護団体の方をゲストに迎え、市民をはじめ幅広い層の参加者を募り干潟ツアーやトークを実施しました。このように多分野の研究者やアーティスト、参加者とともに盤洲干潟をテーマに自然と芸術の関わりを考える機会を継続的に持ち、アートを通じてこの環境の保全に寄与することを目的としています。2025年度は貴財団より助成を賜り、アートイベント「干潟と芸術」開催が実現いたしました。

2. これまでの活動の沿革

申請事業の活動年数	2～4年
年（西暦） 月	活動内容
2020年5月	代表の榎原泰介が初めて盤洲干潟を訪れ、東京湾の干潟をリサーチするATFを始動
2023年6月	ATFのWebサイトを開設、オンライン上でリサーチ内容を公開
2023年7月	伊東多佳子氏（環境美学者）とともに干潟をリサーチ
2023年7月	山田悠氏（アーティスト）とともに干潟をリサーチ
2024年3月	榎原泰介が干潟をテーマにした作品で百年後芸術祭-内房総アートフェス-に参加、ツアーやトークを開催
2024年10月	長期的な活動を見据えてATFを木更津市市民団体に登録
2024年11月	吉濱翔氏（サウンド・アーティスト）と盤洲干潟にてフィールドレコーディングのワークショップを開催

3. 活動エリアについて

活動エリア	千葉県 木更津市畔戸 小櫃川河口干潟一帯
活動エリアの特色（歴史、文化、地域性、魅力など）	盤洲干潟(小櫃川河口干潟)は、千葉県木更津市の小櫃川河口から東京湾に広がる干潟です。1443haの広さは日本最大級であり、日本の重要湿地500指定地に含まれます。河口域の広大な後背湿地(葦原)を持っていることが最大の特色であり、鳥類、魚類、甲殻類、底生動物が豊富に生息する自然豊かな地形・環境となっています。葦原に残る1960年代の人工河口湖計画の遺構、浸透実験池は数種の野鳥の営巣地となっており、鳥類の観察にも適しています。車両は進入できませんが、一般解放されている場所で、県や市の定期的なメンテナンスも行われ、年に数回植物や生物の観察会と合わせた市民参加型のクリーン作戦も行われています。
活動エリアの課題（まず初めに、活動エリアにおける課題を簡潔にご記載ください。続けて、その課題の背景や詳細について、できるだけ具体的にご記入ください。）	地域住民の散歩や市外からの釣り人、野鳥観察者などに親しまれる場所ですが、木更津市は近年移住者が増加し、干潟から約2kmのアクアライン周辺の農地の宅地化が進んでいます。今後、開発や埋立の危機に晒されていくことが予想されるだけでなく、焚火などの不適切な利用、貝類や甲殻類の密漁など、様々な問題にも直面しています。私は5年前に初めてこの干潟を訪れ、その風景に感動しました。浮世絵に描かれた東京湾の葦原、近代化に伴う製鉄所や蜃気楼のような対岸の高層ビルなど、300年間の出来事をすべて表すかのような風景の足元で無数のカニをはじめとする希少な底生生物が活動しています。この環境を維持していくことを課題と考えています。
貴団体の地域に対するミッション（活動の目的）	環境維持はバランスであり、人の適切な自然利用は完全な野生化を抑止し、環境への理解も深めます。かつて干潟では、1989年から10年間「干潟まつり」が行われていました。それは海産物などの屋台を出す漁業組合と干潟探検隊(盤洲干潟をまもる会の前身)の協力で行われ、市民に親しまれた興味深い内容でしたが、漁組が開催地を売却して大型ホテルが建ったことで催しは終了しました。このプロジェクトはどの立場でもないアートの力でつくる現代版「干潟まつり」だと考えています。アートを通じた適切な場の利用を提案し、作品を通じて環境の理解を深めると共に、生物多様性への関心を集めることで、開発の抑止力になることを目的としています。



7. 2026年度プロジェクト評価の観点や指標をどのように設定しますか。

定性（状态的な目標）、定量（数値の目標）をお書きください。

2025年度同様、2026年度も日中に潮が引き干潟の散策が可能な日に限定して開催します。ツアー形式で干潟を歩いて鑑賞する「タイドウォーク」を6回行い、内2回は作家も参加するワークショップの形を取る予定です。（いずれも週末開催、木更津駅—干潟間のバス送迎付き、各回18名予約制）。2025年度の参加者数目標は合計100名（うち3割を地元の方）でした。天候不良のため最終日の開催が叶わず、結果として70名と目標に届かない結果となりましたが、小学生から80代まで多様な年代の方々に参加いただき、地元の方も約3割を占めました。安全な運営と干潟環境への十分な配慮を重視し、参加者一人ひとりの行動に目が届く規模を維持するため、2026年度も1回あたり18名、全体で100名（うち3割を地元の方）を上限目標として実施します。初年度の実績を踏まえ、持続可能な体制で継続的な開催を目指します。また、地域の皆さんが利用する「駅の図書室FLAT」（木更津駅前）にATF専用の本棚を設け、引き続き「干潟と芸術」記録リーフレットや招聘作家の作品集、干潟に関する資料などが閲覧できるようしています。地域の方に知っていただく場として活用し、穏やかな認知度の向上を図ります。

8. 2026年度の翌年以降の、地域に持続的に関わる中期計画と将来ビジョンをお書きください。

※一般申請者は、その計画・ビジョンの展開がこれまでの活動の積み重なりどのように紐づいているかと、その展開に事業や運営体制をどのように反映していくかについてもお書きください。

毎年、ツアー形式の鑑賞やワークショップを軸に、干潟という場に隠れた世界を継続的に開示していきます。各回では、環境の変化をテーマに表現するアーティストを招き、5年目にはこれまで関わった複数名による展覧会やトークセッションへと発展させる計画です。現代の環境は風景に限らず、AIや電子化によって利便性の裏に隠れた見えない領域が広がっています。作家の表現は新しいメディアではないかもしれませんが、干潟という場に着地させることで、新しい感性や不可視領域への想像力を育む体験を生み出します。また、持続可能な社会活動が変化の見えにくい継続的取り組みであるように、アートも従来の成果や生産にとらわれない活動に関わることが、表現の未来の土壌を育むと考えます。当団体は美術作家と研究者を中心としたゆるやかな集まりです。これまでの芸術祭や企画を通じて盤洲干潟をまもる会や市と協働関係を築いてきました。干潟清掃や観察会、勉強会、ツアーなどにも参加し、活動の成果はホームページなどで共有されています。年間を通じた継続的な活動、地域・関係者との協働、活動記録の公開といった仕組みを計画・運営に組み込むことで、地域に根差した持続可能な活動と社会的価値を高めることができると考えています。

9. 2026年度以降、複数年の助成を希望していますか？

はい

<活動の様子>



バスで干潟の入口へ移動し、歩きながら干潟と生物・植物・人間・風景の視点でガイドをしました。



招聘作家の山田悠さんが、作品の案内・説明を行い、質問も活発に交わされました。



砂に描かれた星座を鑑賞。やがて潮が満ちて作品は形として残りませんが、今後アーカイブ公開されます。

